

3 研究の成果

公開授業当日は、インフルエンザのため授業ができませんでした。そこで、今回は今年行ってきた研究を中心にまとめさせてもらいました。

(1) カンファレンスを通して見えてきた学びの事実

今の長野県では、いわゆる「仮説実証型」の研究が一般化している。したがって授業研究会は、手だてが有効であったかどうかという「実証の観点」にそって議論が進行するのが一般的である。そのため、今回のような授業の様子のVTRを視聴しながらカンファレンスを行った場合、教材化のあり方や技術指導の方法に目が向いてしまう傾向が強い。これは、第三者的な立場で上から「視線」を向け「評価」しているにすぎない。一方で、授業者の立場や、子どもの立場に立ち「まなざし」を向けて「共感的」に意見を述べる参加者もいた。一度染み付いた「習慣」を拭い去ることの難しさを感じた。

(2) ワークショップによる教師の学びの姿

単元計画の作成にあたり、小・中学校に分かれ模造紙に付箋を貼りながら、子どもの意識の深まりを予想した。

従来の単元計画は「単線」の計画であった。教師が「こう進んでほしい」という、いわゆる「サクセス・ストーリー」で描かれていた。また、そのように描くことに慣れていて、そのため、いくつかの道すじを幅広く予想し「複線化」する作業には、参加者も戸惑ったようであった。また、教師の言葉がけを考える場面では、さらに戸惑いが見られた。参加者からは「難しい」という言葉が度々聞かれた。これは、技術指導のための言葉は、複数持っているが、学びを導くための言葉はあまり持ち合わせていないことの表れだと考えられる。

(3) 研究会で清水先生（筑波大学准教授）からいただいたご指導

① 「教育的瞬間」について

1時間の授業の中で数回「教育的瞬間」と呼ばれる場面が訪れる。多くは、子どもたちが「どうしたらいいんだろう」と迷う場面に起こる。この「教育的瞬間」を教師が的確に捉えることができるかどうか。これはすなわち学習の流れを見極める力である。

② 授業研究会について

今回のようなカンファレンスを行う場合の適正な人数は4～5人であろう。また、時間は1時間程度必要と考えられる。今日は人数が多すぎたので、一人一人の先生が十分に語るができなかった。内容も欲張りすぎたので時間が短かったのが残念である。

③ 全体として

「楽しい体育」は「教え」から「学び」への転換を求めたが、現実には十分転換できていない。「楽しい体育」以前は、教師が教えるために「師範」出来ることが重要であった。しかし、「楽しい体育」においては、その必要はない。むしろ必要なのは、その運動の特性に触れる経験（実体験）をどれだけ積んでいるかが大切。

4 来年度に向けて

今年度から新たに取り組み始めたこのカンファレンスは、今後、回を重ねるごとに工夫し改善しながら、さらに研究を進めていく必要があると感じた。